

保育の友

子どもたちがリズムにあわせて飛びまわっている遊戯の時、いつもピアノを弾きながらかわいいなあという気持が胸をついてくる。しかし、ひとりひとりの子どもの動きをじっと追っていくと、中には遊戯にたえられない病弱な子がいるかと思えば、もっと積極的な運動をさせる必要のある子もあり、個人差の大きいことに気がつく。

温室育ちの子どもをつくるなら、こうしたことも表面にできることは少ない。しかし指導の力で、すこしでも強く丈夫なからだに鍛えようとするときには、必ず健康保育の問題にぶつかるのである。健康保育の盲点ということ、これが六月号の特集である。まず五人の保育経験者たちの対談によ

って、現在つきあたっている健康保育の問題点が出されている。(1)積極的な運動をさせようとするとき、どの程度までという尺度のきめ方、(2)子どもの疲れの見わけ方、(3)必要な運動量について、(4)健康保育に必要な環境・施設、(5)病気の子の扱い、(6)けがの防止、(7)左ききの子などの問題がでて

いる。これに対して三人の専門医がそれぞれ問題解決の方向を与えている。たとえば平井信義氏は大切なのは客観的な尺度よりも、現実の事態にそくし、保育者同志の討論によって、必要な計画や処置をしてほしいとし、そのための知識や考え方を示唆している。また、座談会の中である保育園で二年保育の子が一年保育の子より発育が悪かったということあげて、保育園にいるとあって健康の伸びが遅れるかも知れぬという心配には、平井氏はひとつの事態からすぐに次の結論を出すことを戒めているが大切なことであろう。

吉見静江氏は病後の子どもの保育は医師の承認をえてからと助言している。しかし実際には家庭でゆっくり病気を看護してやることができず、自転車子どもを運び、そつと園にあずけていくなどという現実の容易ならざる姿を感じられる。

この号は健康保育に関連して、前から続いている「子どもと健康」(その五)欄は弱い子どもを丈夫にする工夫として、病気にかかりやすい子、顔色のわるい子の病状の原因と対策についてのべている。

七月号は、全国保育大研究会準備号として、この八月に敦賀で開かれる保育園の大会の分科会の研究課題が掲載されている。「保育所の児童を必身ともに健やかに育成するために」という全体テーマのもとに、十の分科会に分れている。1 乳児保育 2 健康管理 3 給食 4 問題のある児童 5 環境整備 6 自由あそび 7 保育計画 8 保育に欠ける子どもと家庭 9 保育者の生活 10 保育所の運営及び管理。討議の課題につ

いて予めこれだけの準備をして、大会に臨むのは賢明である。どのような討議がおこなわれるか、楽しみにしていよう。保育所と幼稚園の二元性は歴史的な問題であるが、この分科の分け方についてみても、第六分科「自由あそび」は幼稚園と共通な問題であり、第七分科「保育に欠ける子どもと家庭」は保育所に特に必要な問題である。保育所には保育所特有の問題があるとともに、幼稚園と共通の問題も多いことを知ることが出来る。幼稚園と共通の問題が多いため、幼稚園と保育所とはもつとお互に交流し合い、理解し合ったらよいのにと、第九分科で「保育の生活」がとり上げられているのは重要である。保育の職場がもつと合理化され、保育の生活がもつと豊かなものになるために、どのような討議がなされるか、何より対策が語られるか、期待したい。

幼児の指導

六月号には、「自然の指導はどんな環境でもできる」が特集され、自然の環境に恵まれている園での具体的な事例なども書かれている。どんなに環境に恵まれていなくても、設備がない園でも、自然の指導についてあらためて考えてみたい問題があると思うので一読をおすすめする。

宮原誠一氏の「幼稚園や保育園の友に」は、心して読みたいものの一つであった。人間的にみずみずしい教師になるために、文学作品を読もう。ちょっとしたヒマに、機敏に小説や詩集にとりつくこと。そのうちにゆっくりとはなく、ますますにとりつくこと。気のむくものをひそかにひとりで読みあげようこと。みずから情緒をみずみずしいものにするために。

世界の子どもたち、今月はフランスの場合で、中でもおもしろかったのは、しつけは親だけのものではないという点で、日本の通念では、しつけは母親のするもの、教育は学校でするものと思いきまれているよ

うで、他人がよその家の子に何とか言っは悪いように思われているが、フランスではしつけは母親だけのものではなくて、母親の見えないところでは、そばにいるおとなが責任を持たなくてはならない。子どもは親を通さずに直接社会からもしつけを受けること。この点日本でも大いに学びたいところであると思う。

七月号には夏期保育を楽しくと題して、夏期保育のもつ意味、具体的な方法、記録を中心に特集している。

「ガラクタ公園をつくれ」神崎清氏の時評も興味深いものである。デンマルクの建築技師が考えたガラクタ公園―いたずらのできる児童遊園地。ブランコやすべり台はなく、空地においてあるのは、レンガや板片のガラクタである。しかし、おおぜいの子どもが集まって、そのレンガや、板片を組み合せて、自由自在に組み立てて遊んでいる。わからないことは公園の指導者のおじさんに教えてもらって仕事をにつけて

いく。子どもはおもしろくてたまらない。教育的にみても、創造的であり建設的であり生活的である。新しい遊び場をつくる運動では、たんに遊び場をふやすだけでなく、古い固定観念を打破して、子どもの自由な創造力をのばしていく、ガラクタ公園式の構想を大いにとり入れてみたいと強調しておられる。

幼児と保育

六月号の「型にとらわれぬ幼児教育」という特集は、無難な安易な保育に流れることに反省をし、何かもっと心からの躍動のある保育をしたい、もっと子どもの生命に触れたほんとうの保育をしたい、と願っている身にとっては、一応の興味で手にとって読んだのであった。

「むしろ動物に近い育て方が必要」という木田文夫氏の所論には心からの共感をおぼえた。「神経質すぎる、子どもの世話をや

きすぎる、これが日本のお母さんに共通した欠点です。」「幼児の心理を理解していない」それよりも前に、まず「家庭心理学が必要」などなど教師にとっても母親にとっても是非一読をすすめたい。

つづいて型にとらわれない幼児教育の実践例が二、三の幼稚園からあげられているが、これらは一つの参考ではあろうが、これも魂のあつてのことで、この形だけを真似されるようなことになったらどんなものであろうと思案されたりもする。

「幼児はこんなところで遊んでいる」というのが、七月号の特集である。

夏休みを迎えるのにふさわしいテーマと想ったが、内容をみると、夏休み中の指導を示唆するにとどまらない。家庭・施設以外の子どもの生活ルポルタージュ「誠ちゃんを追って」は、家庭であまりかまわれない子どもたちが、彼等なりに、いろいろな遊び場を探し、遊びを工夫して楽しんでいる姿をおもしろくとらえ、子どもの世界を

のぞかせてくれる。子どものこのような世界を頭から否定してしまわずに、愛情をもって眺めることから、保育の妙味も増してくるのではないかしらと思われる。

「おとなの見ていないところで、(関計夫)では、このような子どもの姿に対して暖かい目で指導が説かれている。

子どもたちの生活の中に問題が起った場合、母親がとかく原因と考えがちな「わるいお友だち」についての辰見敏夫氏の意見は、母親にも、ぜひ一読をすすめたい。

その他、「子どもの道徳」「子どもに与える話のえらび方」「楽しい夏のあそびの環境を」「紙鉄棒」などと共に、毎月のことながら、六領域にわたった指導技術の解説も、大へん参考になる。

保育ノート

六月号は「保母さんからだ・保母さんのレクリエーション」ということについて

の特集で、時期的にとり上げられている。

幼児を扱うには心身ともに健康でなくては正しい意味の保育はできない、といわれる。保育者は毎日子ども健康状態をよく観察し十二分の注意を払っているが、自らの身体については気にしながらもなかなか最上の状態を保てないというのが現状である。それほど保育の仕事は、はた目にもみるよりも労力もついやし、細かい神経もつかうものなので、記事としてはのっぺいがないが、これをいやす、レクリエーションというものが考えられているのはたいへんによいことだと思う。緊張の連続が不可能なこととはいうまでもない。今までのことをすっかりと忘れて気分転換をはかることこそ、次への元氣もわくものであることを考えて、自分の環境にあった、許す範囲のレクリエーションを考えて普段の緊張をほどきたいものである。

座談会「保育者と年令」はそれぞれの年令にある人の考え方がわかって面白い。そ

れとともにこの仕事にたづさわっている人たちが、本当に楽しんで毎日をすごしていることが感じられて、子どもたちの幸福を今更のようにうれしく思った。

七月号は「保育に欠けた子ども」についての特集号。これを分けると、

(1)母親が十分子どもをそだてることのできない場合。

(2)めぐまれすぎた環境にそだった子どもの場合。この二つの全然反対のような子どもの姿が書かれている。

(1)の場合は「貧困である」とか「家が忙しくて手が届かない」などすぐ考えられる。

この場合は教育より何よりもまづ愛撫が必要である。

(2)の場合は

・ 経済的、物質的環境の過剰

・ 両親の教育意識の過剰

・ 両親其の他周囲の人びとによる愛情の過剰

・ 子どもに対する期待の過剰

こういうめぐまれすぎたため子どもらしくない子どもができ上り易い。

この場合はしぜんの子どもの世界にかえし社会性を養い自立の気持をつけるよう家庭とともに歩んでいくことが必要である。

以上のようなことが、いろいろの立場から書かれている。

保育の手帖

保育の手帳で最も力を入れている年間保育計画に対して、経験深い実際指導家から意見を述べられ、それに保育案研究委員が回答するという形式が今月からとられている。六月号では東京都公立幼稚園早塚氏の意見の中から次の三点をとりだして三木安正氏が答えている。一、「年間保育計画」が社会性に重点を置いているということ。二、「年間保育計画」は理解しにくい点が多いのではないかとということ。三、グループ活動に対するねらいが高度でありすぎるの

ではないかということ。

七月号では千葉大学付属幼稚園富田氏の質問で次のことが挙げられている。一、望ましいバーソナリティーの具体像について。二、保育案の形式に関して、「集団生活の発達」と、それに応じた「指導の要領」があれば「六領域に分けた指導の重点」などはいらないのではないか。三、幼稚園の指導と保育園の指導の区別。四、この年間計画の展開について、主題や単元の考え

方。
紙面の都合で回答の要約は省略するが、これら批判や意見の交流は、研究委員の努力の結果が一方的に偏することなく、さらによいものが生れてくる基盤ともなり、回答を読んでいると短いことばの印刷に至るまでのお考えや経過がよくわかるのである。

六・七月号と連載されているものに、幼児の造形とことばがある。井手則雄氏。

幼児の造形指導がとかく困難なものだっ

たところから、精神分析の考え方にもとずいて描画による性格診断がはやったが、保育の中の造形活動は、幼児の生活と成長に關した具体的な人間形成の手段の一つであるということ忘れてはならない。

子どもの絵にあらわれる性格的なものも、先天的なものより、生れてこの方ふれてきた周囲の条件の反映という考え方にかわってきており、したがって幼児の場合もなかまともに行動しながら、ことばを使って交わり、自分の考えや感情や欲求などを分けあったり、ぶつけあったりして発達していく。

幼児の造形活動とことばの発達の関連の研究は体系的なものはいくつか、ローエンフェルドによる描画の発達段階を紹介し、次に「新しい画の会で日本の子どもの場合の区分を挙げておられる。この段階にしたがってことばの表現発達との関係をみられている。結論からいうと、ことばと造形の二つの活動は相互に支えあっている。ことば

と描画の発達関係はつりあっている。ということが、くわしくかかれ、次号につづいている。

外に坂元彦太郎氏の「幼児の教育を考える」が連載されている。

教育講座では六月号には梅雨、七月号には七夕と季節の題材をとらえて読みみである。

保育案作成がこの誌の編集中心になっており、さらに研究を重ねられることを願うとともに、その他の保育の窓や教養講座なども、よりうるおいのあるものをと、思うのである。

保 育

入園後三か月目の六月になると幼児も幼稚園に馴れてきて、教師も個々の幼児が理解できるようにすると同時に、問題もまた多くなる。

村山貞雄氏の「入園後の問題」ではその

点私どもの参考になり、また指導の方向を心理的に診断し示してくれる。

いろいろと指導する上にも、ある時は賞め、ある時は叱ると手段を考慮する。その中でも叱ることはなかなかむずかしい。毎号続いている、早川元三氏、じょうずな叱り方では、感情形成についてと題し叱り方を指示してくださり、ほめることと叱ることとの関係がよくわかる。

研究物としては、神田寺幼稚園福永かをり氏の、二年保育児と三年保育児の差について、も前号の続きだが、まとめとして、その差がよくかかっている。

幼児を理解するということは、私どもが常に考えまた悩むところだが、大西憲明氏がこの号から、幼児をどのように理解するか」と題して書いていられる。記録するところが先決で、指導要録も大いに活用し一つの次の保育への資料となる。

卒業のときのみと考えていた指導要録もこのように活用すれば事務的なものから活

が生れてくるであろう。

七月号は、夏の保育計画と水あそび、栗山晴光氏、科学生活の指導、遠藤孝子氏。夏休みを前にみる私どもにはこの二つが目をはひく。観察は大切であることは知っているが、ともすると学校的色彩をかもしたしてしまう。何とか自然と幼児の生活の中に観察を科学生活をと誰もがながい考え、研究することであろう。

栗山氏のは私どもへ観察の材料を提供してくださっているが、私どもは材料としてよみ、これをそのまま利用しないで、何か工夫はないかと考えさせられる。事物をよく教えることより科学心のおこるような環境をつくる、このことが幼児には大切である。

月刊カリキュラム

まず六月号についてみると、梅雨期であるこの月は、何かとうつつうしく、日日の

保育も程よく考えてしなければならないことだろう。そこで今月は「健康」と「絵画製作」の二つにスポットを当ててみることにしよう。

○健康

・この中の梅雨期の生活を拾ってみると、天候が悪かったり、気温の変化もはげしいので、幼稚園の行き帰りまで内外共に注意を払い、怪我や事故のないように気をつけるなど細かい注意がかかっている。

・連日の雨で狭い室に大勢の子どもが活動しなければならぬ日が多いので、遊具や物の配置をよく考え、なるべく室内や廊下など広く利用し工夫すること。

・室内に閉じこめておくと、子どもたちは活動力があり余って大さわぎになったりする。力いっぱい全身運動のできる遊具を選んだら（移動式のものなど便利）、繩その他の物の応用で一つの遊具も変化して使えるなど、具体的に工夫した成功例があがっている。

○絵画製作

雨が多いこの月は絵をかいたり、物をつくったりする機会も多いことと思うので、

この期に創造の意欲と喜を覚えさせるよい時だ。

・子どもの感動を大胆に表現させたいこと。

・子どもが描けないと言ったとき、どうすべきだろうか。

・子どもの自信を失わせる理由は何だろうか。

(作者は三つの理由をあげている)

・布の利用、包紙、空箱、その他材料の利用、

・子どもたちが材料や用具を自由に出せる棚など、写真を参考に造ってみてはどうだろうか。

次に七月号をみると、筆頭に波多野完治氏の「望ましい教師の姿」が眼にうつる。

氏は視聴覚のことで書かれているが、幼稚園ではまだまだこの面が欠けている。今後

の教師は視聴覚的方法を身につけた人でありたいと言われている。我は望ましき教師やいなや！一読をすすめたい。

平井信義氏の「幼児のこぼについて」はことばの発達や、発達に及ぼす条件、言語障害などわかり易くかかれていて、保育者として是非よんでおきたい項である。

各保育内容の中では、自然の中の、「試みたい水あそび」が具体的に面白くかかっている。水ぐるま、さいはん、水でっぽうなど。ぬれるからと禁止ばかりしないで七月のこの月こそ思いきってさせてみてはどうだろうか。

三才児の保育については、土屋真砂子氏の「理想の環境」、秋田美子氏の「七月の保育技術」鈴木とく氏の「着衣の習慣」植松治子氏の「母親指導」がのっていて、三才児の指導者は是非よんでほしいところである。

* * *

幼児の教育 第五十六巻 第十号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年九月二十五日印刷

昭和三十二年十月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願い致します。